

## 第 1 回世田谷区総合教育会議

日：平成29年7月21日（金）

場所：世田谷区民会館ホール

午後 3 時50分開会

司会 それでは、第 2 部の世田谷区総合教育会議を開催いたします。保坂区長、よろしくお願いたします。

(スクリーン使用)

保坂区長 それでは、ちょっと時間が延びておりますが、急ぎぎみに総合教育会議をこれから始めたいと思います。長時間で疲れているかもしれませんが、大事なところですので、ぜひおつき合いをいただきたいと思います。

きょうは傍聴者を公募しておりますので、参加と協働ということ掲げています世田谷区として幅広くこれをやっていくということで、傍聴者の方、多くは教育推進会議から参加されている方がいらっしやると思います。冒頭でもちょっと触れましたとおり、この総合教育会議は数ある自治体の中でも非常に特徴がありまして、1つは、公開の場で議論を進めていること、2番目には、総合教育会議は、傍聴者がいるといっても数人が見ているというような開かれ方がどうも多いようでして、このように教育推進会議とつないで濃い内容で きょうはありませんが、これまでは、きょうとは順番を逆にして、この総合教育会議をやって教育委員、教育長、私ほかの意見を議論した後、教育推進会議、ワークショップをやって、学校現場や区民、保護者、さまざまな立場の人から、例えば特別支援教育、障害を持つお子さんの支援について、どのような展開が必要かというようなテーマで話していただく、そんな取り組みをしているのは日本でもそんなに多くないということを知っていただきたいと思います。

もう1つは、この会議は教育の過渡期、転換期であることを捉えて、現状分析、打開策、対応策にとどまらずに、新たな教育改革につながるビジョンを語る、そしてまた、それを区民と共有するというところでやってきました。

論点1を出していただきたいと思います。きょうは2つの論点で議論いたします。1つは、幼児期からの豊かな「遊びと学び」の環境づくり、先ほどのシンポジウムとびったりつながりますよね。自己肯定感についてはかなり言われるようになりましたけれども、世田谷区の5年前の調査では、小学校5年生に自分のことが好きですか「はい」が50%、これが中学2年生、14歳になると「はい」が3割になってしまうということです。他者から必要とされていると思いますか、これは小学校5年生で4割が「はい」、ところが中学2年生になると3割に低下をする。最近、ある民間企業の調査で、若者たちに自分は創造的であるかどうかという調査で、アメリカは47%が自分は創造的だと思う、イギリスは37%、

オーストラリアは46%、ドイツは44%、日本はどのくらいでしょうか。実は8%なんですね。同種の調査はみんなこういう傾向が出ています。つまり、自分は価値ある人間と思うかとかの学生や若者への調査で世界最低レベルの自己評価の低さということが現状です。

他者との関係性の重要性というのがありますけれども、人は関係性の中で成長する。他者から承認をされ、みずからを承認し、相手のことを考え、そして関係を育てていく。よく言われるいじめは、人間関係のゆがみ、きしみが解決できずにもつれて、こじれてしまう調節障害というふうに言いかえることもできます。非認知能力について、今シンポジウムで整理していただきました。総合教育会議で、皆さんからの意見でちょっと振り返ると、これは数値化したり点数評価になじまない能力だね、あるいは、例えば友達が困っているときに助けるという力、助けが必要だというときに仲間を募ってその助けを共同化する力、あるいは、子ども集団の中で起きる先ほどのいじめとは逆に、衝突やトラブルを大人の力に頼らないで主体的に解決する力、失敗したことを受け入れてやり直すことのできる力というのは、やはり大きなタイトル、一番上の「遊びと学び」の環境づくりというのが大事なんじゃないか。つまり、遊びの中でこの三角形のこのテーマはほぼ包摂されて、しかしながら、そういう遊びというのは衰退している。特に外遊びについては絶滅危惧種になっているということで、世田谷区ではそとあそびプロジェクトというのを始めているわけです。

次をお願いします。次は、「学びの質的転換」と「新教育センターの役割」を話します。なぜ学びの質的転換が必要なのか。ここはやはり自己肯定感があんなに低い、自分は創造的だと思えない若者がそんなに多いのはなぜなのか。そこは日本の国際競争力の低下に実は大きく関連をしていて、高度経済成長時代のマニュアルを的確にこなす処理能力の高い人材は育っているかもしれないが、しかし、指示待ちである、マニュアルがないと動けないというような教育のあり方からまだまだ転換し切れていないところにもってきてAIが出てきた。つまりは、定型的な処理、パターン処理は当然得意とするだけではなく、複雑な条件が要求される、その錯綜した情報を瞬時に読み取って的確な対応策を出すということも、一定の条件下ならAIのほうが多分正確で早いとなると、人間は何をやっていけばいいのかということ、やはり学びの再構築というのはこれからの時代必要だろうというテーマ。

そして、新教育センター。新教育センターは、これから教育長が説明しますけれども、先ほどのシンポジウムがありました。チーム学校とか学校支援、これまで学校というのは

どうしても先生の技量、力量、そして学校長、管理職の能力ということ全てが自己完結的に見られてきたというところがあったと思います。しかし、これからの時代、学校ではより困難な局面が起きてくるだろうという、もう既にそういう現状に入っているかと思えます。これまでの固定概念を壊してチームで学校を運営する。そのチームは学校の外から教育のスペシャリストが学校支援に入るといった新しい考え方があって、これはオランダの教育センターなどで既に行われていることですが、これを考えていいのではないかと、そのあたりを議論していきたいと思えます。

まず、教育長から新教育センターについて簡単に触れていただきながら、1のテーマに移っていききたいと思います。

堀教育長 それでは、スライドの3を出してください。教育総合センターの進捗についてお話しさせていただきます。

教育総合センターの整備につきましては、第2次世田谷区教育ビジョン・第1期行動計画のリーディング事業に掲げまして、ことしの6月に構想を取りまとめさせていただきました。教育総合センターを学校教育の総合的なバックアップセンターと位置づけておりまして、4つの目標を基本方針として掲げております。目標1、子どもと向き合う世田谷の教育の推進、目標2、子どもの未来に向けた学びの再構築、目標3、子どもの笑顔を広げる、目標4、ネットワークをいかした実践の場です。

そして、教育センターが担う機能につきましては、6つの機能とさせていただいております。まず、教育研究・教職員研修、学校情報収集・提供、教育相談・不登校対策、幼児教育センター、学校支援、地域連携の6つの機能です。

スライドの5に参りますが、今回の総合教育会議の論点の関連としまして、教育研究・教職員研修の機能を充実させていきたいと考えており、先進的な教育研究・教材開発の仕組みや、それを可能にするICT環境を整えていく考えでおります。

最後に、新教育センターの組織のイメージです。このような組織をイメージして今対応しておりますが、このイメージは教育委員会の事務局組織の中にあり、その運営に当たりましては教育専門職等の拡充や専門家の活用を図り、先駆的な調査研究、実践的な研修、学校支援が可能となるよう、こちらに示させていただきました組織イメージ図のような推進体制で取り組んでいきたいと思っております。

説明は以上でございます。

保坂区長 短くまとめていただきました。それでは、1のテーマに入ります。澁澤委員

からお話を伺っていきたいんですけども、幼児期からの豊かな「遊びと学び」の環境づくりなんですけど、これまでも議論してきたように、高度経済成長でなるべく効率よく競争して商品を大量に売っていきこう、そのためには無駄なことは捨てていきこうと。先ほど情動スキルというような言葉が非認知能力のところでも言われていましたけれども、たくさんの無駄なこと、つまり遊びというのは無駄の集大成かもしれないけど、それ自体は価値を何ら生み出さないようできて人間の重大な基盤を形成しているということは、ようやく今ごろ我々は気づいてきたわけです。全国の中山間地の農山漁村のフィールドワークをされてきた澁澤委員から、まず冒頭発言していただきたいと思います。

澁澤委員 今まさに中山間地が私の暮らしのほとんどの舞台なんですけれども、そこに都会の大学生たちを連れて行って環境教育ですとか、あるいは地域づくりの教育をやらせるんです。昼は大体森の中で飯を食べさせます。森に囲まれた、里山に囲まれたところで、じゃ、みんな御飯にして、これから1時間自由行動だよと言うと、まず1人も森に入ろうとはしないです。みんな集まって広間の真ん中で食事をします。それから、もっと言うと山の中の道のないところ、そんなに傾斜が強くない、ふかふかの落ち葉があるような、そういう傾斜を登れる子のほうが少ないんですよ。もう四つんばいになっちゃう。つまり、自然の土の上を歩くとか、あるいは自然の中で自分の心を解き放つということはほとんどできなくなっている。それが今の多くの大学生の実態なんです。

彼らは、目の前から来た情報に対してはとてもうまく対応ができる。目の前から来た情報、それは授業であつたりとか、ソーシャルネットワーク、まさにネットもそうなのかもしれないけれども、一方方向に伝わってくる情報に対しては対応ができるんだけど、山の中とか自然の中、あるいは人間関係も遊びもみんなそうですが、360度、あるいは上と下も含めて、あらゆるところからいろんな情報が入ってきて、それを瞬時に自分の中で判断して決めていかないと遊べない。理屈っぽく言っちゃうとそんなことですね。やっぱりその能力がとて落ちてきているということがあると思います。これは結局、自分の命とか、自分の体がどこにつながっているかということを確認しようとしなくなってきた。もう自分というのは、基本自分の頭の中だけで、自分の欲望をどう満足させていくかということだけが生きるということの生きがいであるというふうになってきている子たちが多くなっている。自分の肉体ということをおぼえている。

例えばよく言うのは、スマホは僕たちの時代は酸素と一緒にですよ、酸素依存症なんて言わないでしょう、スマホ依存症だけ何で言うんですかと学生たちは言うんですけども、

明らかに酸素がなかったら肉体は生きていけないんです。スマホがなくても肉体は生きていくことができます。結局、自分の命というものがどこにつながっているかという感覚を持たないと人に優しくなれない、ほかの生きものに優しくなれない。関係性というのは、人と人との関係性だけじゃなくて、自然との関係性もあるし、それから世代と世代の関係性もある。その辺のことは、やはり遊びだとか自然の中の体験ということで、自分の頭で考えることも必要だけれども、自分の体で物を考える習慣をやっばり子どものうちから身につけていかないと、基本的に優しい子どもをつくることができないし、自己の肯定感を持つことができない。

僕はこの年まで、64歳になるまで、先ほど区長がおっしゃったように、とにかく効率的に、そして、なるべく煩わしいものを減らした社会だけをずっとつくってきて、豊かな社会をつくろうと一生懸命頑張ってきた世代なんですよ。だけれども、それはある意味では明らかに間違っていた。やっぱり、これから子どもたちは豊かさだけではなく、幸せに生きてもらわなきゃいけない。幸せとは何なのか。幸せは全部関係性の中にあるんですね。豊かさは数ではかることができる、お金ではかることができますけれども、幸せは全部関係性の中にあるんだということが、恥ずかしいんですけれども、この年になってやっと骨身にしみて気づいてきた。そんな意味で、これから体験だとか、遊びだとか、自然だとか、世田谷は自然にまだ恵まれていますから、なるべくそういう機会を、特に子どものうちに持たせる場をたくさんつくってやりたいなと思っています。

保坂区長 続けて、松平委員にも伺いたいんですが、体育の先生でいらっしゃって、また学校現場をずっと預かってこられて、運動自体はスポーツクラブもありますし、少年野球・サッカーもあるし、子どもたちはしているかもしれない。ただ、今ここで言っているのは幼児期からの自由遊びというか、みずから発案して友達と集合して遊ぶというような古典的な、昔、我々がやっていたような遊びがだんだん侵食されてきている状況の中で、子どもの体とか育ちについて、一言お願いしたいんですが。

松平委員 現在、子どもたちの運動の二極分化が問題になっています。つまり、運動する子どもとしない子どもにはっきり分かれています。この傾向は、小学校でも見られますが、中学校へ行くと一層顕著になります。これを学校現場でどう改善していくかが今問われているのです。確かに、体力や運動能力などにおいては、上級学校になるほど個における差異が顕著になります。体育の授業において、苦手な子どもを得意にさせるのは大変なことです。ですから、せめて汗をかく心地よさ、体を動かす喜びを体験させ、運動好

きな子どもに育てたいと思うわけです。

幼児期からの自由遊びが大切なのは言うまでもありません。幼児期の頃はまだ体を動かすことに抵抗のある子どもは少ない。だから、できるだけ友達と遊ぶ機会を設け、その中で楽しい体験や成功体験をたくさん味わわせてあげ、運動好きな子どもを増やしていくことが重要だと思います。

保坂区長 それでは永井委員に伺いますが、子どもを育てるときに「遊んでばかりいないで」と、どうもお母さんがずっと言ってきたような気がします。子どもは遊びの天才だなんて言われて、ほっとけば遊ぶのよというふうに思ってきましたけれども、よかれと思って子どものためにしてきたことが、頭から転ぶ子もいるし、斜面を登れないとか、子ども同士、幼児期から物のおもちゃのとり合いから始まって友達との関係性を豊かに広げていけるような環境を逆に衰退させているというようなことがあるのかなと思いますが、親の立場からお願いします。

永井委員 そうですね。確かに、子どもがいつまでも同じようなことをやっている、いつまでもこういうのをやらないで早くお風呂に入りなさいとか、勉強しなさいとか、よく親は言っていると思います。

ここでヒアリの話をするのはおかしな話ですけども、今ヒアリの話題が報道されていますが、発見されてすぐ、まだ情報が少ないときに、あるニュース番組で3歳ぐらいの男の子を連れてお母さんに、「どう思いますか」とインタビューしたときに、「怖いから外で遊ばせられないし、アリにさわってほしくない」という答えをしたんです。それを聞いた男の子が、「だってアリをつんつんしたくなっちゃうんだもん」と言ったんですね。どっちもわかるなと思いました。子どもにとってはアリをつんつんすると、「うわっ、何かおもしろい」と好奇心が広がって、楽しいと感じるんだと思うんですけども、親としては子どもを危険な目に遭わせないように、本当はヒアリを注意すればいいだけなのに、在来のアリも全部ひっくるめて外遊び禁止という答えを出してしまう。親は子どものことを思っただめだよと言ったとしても、いろんなことにもしかしたら興味や好奇心の芽を摘んでしまっているときもあるのかなと子育ての中で思います。

私の話で恐縮なんですけれども、以前、澁澤委員に私の息子の感性が育っていない気がするというような話をしたときに、「感性って、壁や屋根をつくってしまうと広がっていかないよ」と言われて、確かにそうだな、例えば外で遊ぶことにしても、危険だと思うとすぐにやめさせてしまったり、他にもそういったことがあったんじゃないかなと思いました。

親はどうしても子どもに対して大なり小なりの理想があって、つい型にはめてしまったり、子どもに対してこれはこういうものだとか決めつけてしまっただけではないかなと、子育てを振り返って反省したんです。私も今、子どもが大きくなって少し子育てのゆとりができて、就学前の幼児期から子どもの好きなことをさせたり、外で思いっきり走らせたり、遊びの中から自然に得るといようなことを身につけさせたらよかったなと、もう遅かりしなんですけれども、そういうことを考えるようになりました。

子どもに手がかかる小さいときというのは、本当にもう1人お母さんが欲しいと思うぐらい、とにかくお母さんは忙しいなという気がします。核家族化になって預ける人や、頼れる人がいないということも一因かもしれないですけども、じっくりと子どもと向き合う時間がなかったり、ついつい親が手を出してしまったり、子どものすることをせかしてしまったりというようなことも現実にあると思います。それでも、公園の横を通ると子供を遊ばせている若いお母さんたちとかを多く目にしますし、休日はお父さんも一緒に遊んでいる姿も見ることができます。そういうときに地域の中に小中学校を中心にして活躍してくれているおやじの会のような、例えばグランパの会とか、グランマの会といった会があって、仕事をリタイアされた人だとか、昔PTA活動をされていた人、どんな方でも自分の得意な分野で先生になって、公園で自然観察をしたり虫や植物の名前を教えてくれる先生とか、遊び道具の作り方を教えてくれる先生とか、紙芝居とか絵本を読んでくれる先生といった青空教室のいろんな先生がいて、子どもの好きなこと、興味のあることに寄り添って、幼児期からの育ちを支えてくれる地域の方々がいるといいなと思います。

また、お母さん、お父さん自身が余り外遊びをしてこなかったという世代ももしかしたらあるかもしれないんですけども、そういった親の方たちも一緒に参加して、教えてもらったことを家庭で子どもと一緒にこうだったかな、こうすればうまくいったかなと言いながら、やってみるのもいいんじゃないかなと考えます。

保坂区長 ありがとうございます。

次に、井上委員に伺いたいと思うんですが、今、澁澤委員から、森の中に入っていこうとしない若者たちのお話が出ました。井上委員も大学で学生たちに向き合っていると思うんですが、一方で地域の学校にもかかわっていらっしゃるんですが、この第1テーマは小さいころ、幼児期なんです。実はあれもこれもと、例えばアクティブラーニングということが言われれば、アクティブラーニング塾みたいなものが立ち上がったり、何か自動販売機みたいにコインを入れれば商品が出てくる的な社会になっていますよね。この幼児期に、

まさに非認知能力のところで言われたことは内発的な、内側から込み上げてくる情動であったり、意欲であったり、ひらめきであったり、思いやりであったり、そういうものですよ。つまり、幼児期の中である意味自己決定、何もしないことや迷っている時間も含めて、そういう子どもの幼児期の育ちについて、学生や学校を見ていてお感じになっていることはありますか。

井上委員 第1部で話題になった非認知的能力ですが、アメリカの有名な研究で、目標に向かって頑張る力とか、他人とうまくかかわる力とか、あるいは、感情のコントロールというようなことを大事にしていたグループとそうでないグループでは、大人になったときの生活の状況であったり、犯罪の有無において大きな違いがあることが明らかにされ、注目を集めました。加えて、非認知的能力の形成においては、幼児期はとても大事なのですが、幼児期を過ぎても伸ばしていくことができるのではないかと、という見方もされています。それに対して、知的な能力は、ある程度の年齢で大きな差はなくなってしまうのだそうです。

今、区長がお話になったことで感じるのは、幼児期はもちろん大事なのですが、例えば中学生や大学生はもう幼児ではないので、その意味ではもう遅いと思われがちです。でも、中学生なら中学生なりに、大学生なら大学生なりに、先ほど申し上げたような目標に向かって頑張る力、他人とうまくかかわる力、感情をコントロールする力、そういったものを高めていくことができるはずで、そのための環境を私たちが今までうまくつくることできなかったのではないかと。そういうことを工夫していくことによって非認知的能力 まさに見えないものですから、わからないことも多いのですが を育てていくということが大事ではないかと思っております。また、世田谷区では、これまでもさまざまなことをしてきましたが、せっかくの成果も個々の事例のなかに留まってしまっているようなので、全体として集約しながら、いろんなところで活用していけるような仕組みをつくっていくことが求められると感じます。

保坂区長 ありがとうございます。プレイパークなんかを見ていますと、福島県の原因事故で長らく外遊びができなかった子どもたちが世田谷に来て、世田谷の子と一緒に遊ぶ場面なんかを見てみると、本当に短い時間で、数時間で身体性を取り戻して行って、生き生きと夢中になって遊ぶ姿を見て、子どもたちはやっぱり変わっていないんだな、環境が変わっているんだなと思うところなんですけれども、堀教育長、最初のところで幼児教育・保育推進ビジョンをちょっと飛ばしましたので、今のテーマの「遊びと学び」の環境

づくりということと、幼児教育センターという構想とシンクロしているんだと思うんですが、どんな状況でしょうか。

堀教育長 きょうは、第1部のパネルディスカッションで吉田先生から、私どもが今進めている幼児教育・保育推進ビジョンに関連した話をお聞かせいただきまして、大変心強い思いをいたしました。その非認知的能力とは何なのか、それと非認知的能力が認知的能力と関連して、絡み合って発展するというお話をいただきました。いわゆる遊びや毎日の生活の中で非認知的能力が成長する、育まれているということだと思っておりまして、フィンランドに行ったときに、ラーニング・バイ・ドゥーイングという話を視察中何度も聞かされました。何度か話をしておりますが、フィンランドのほうはマイナス15度Cまで外で必ず遊ぶ。小さな子どもたちが防寒着を着て、園庭とか、公園とかで、表現がちょっと美しくないんですが、本当にごろごろ遊んでいるんですね。こんな寒い中で何で遊ぶのかなという思いはしましたが、ラーニング・バイ・ドゥーイングだそうです。遊びの中に学びがあるということでした。

1つ、ちょっと関連する話で、司馬遼太郎さんの「胡蝶の夢」という話があります。この中に、松本良順と伊之助という方が出てくるんですが、伊之助はおじいさんに小さいときに納屋に閉じ込められて、同じ年の子どもたちと遊ぶことがなかった。ただし、とても記憶力がよくて能力が高かった。でも、やっぱり小さいときに同じ年の子どもたちと遊ぶということがないと、自然にでき上がる、いわゆる素朴な倫理観、助け合うとか、分け合うとか、そういうのがないまま育ってしまうんですね。やはり伊之助は、そういう倫理観に欠如して、大変能力が高かったんですけれども、人生を転げ落ちていったという小説があります。

そういうことを考えますと、先ほど区長の話にもありましたが、世田谷は今、幼児教育・保育推進ビジョンの中で、世田谷の特色の保育、教育を進めていこうという考え方がありまして、そとあそびプロジェクト、世田谷はプレイパーク発祥の地なんですね。今、区長部局のほうは、そとあそびプロジェクトを検討しております。私ども教育委員会も今回の幼児教育・保育推進ビジョンの中で、いわゆる遊びは学びというような具体的な取り組みができないかと考えておりますし、幼児教育センターをこの後の論点整理2の教育総合センターの中に設けて、具体的に取り組んでいければと考えております。

以上です。

保坂区長 それでは、論点2のほうに移っていきたいと思います。

これは井上委員からお話を伺っていきたいんですけれども、明らかに時代が変わり、そして、今の1のテーマで語られたことなんですけれども、非認知能力的なこと、きょう会ったばかりの人とチームを組んで何か事態に対処するとか、専門分野を横断して共同で何かをつくり出すとか、そういう力というのは日本社会は相当すぐれていた時期もあったと思うんですね。今、そういう意味で時代が大きく変わってきたことに、高度経済成長時代の教育システムが十分かみ合っていないところもあって、ここに学びの再構築、地域と連携、チーム学校とかがありますが、特にどういうふうに学びを再構築するべきなのか、お考えを聞かせていただけますか。

井上委員 大変大きな、難しいテーマですね。区長が言われたように、かつて、豊かな産業社会をつくるのが目標であった頃は、そうした社会に必要な知識や能力をみんな同じように身につけなければなりません。ですから、試験では、授業で出てきたことをよく勉強して、「一人で、一定の時間に、なるべく多くの問題に正解する」ということが求められましたし、それが認知的な能力として高いとされていました。でもこれからは、そうしたスタイルから、例えば、一人ではなくて、誰かと一緒に回答したり、わからないことは本を読んだり人に聞いたり 今これをすると、カンニングになってしまいますが

みんなで考えていくことこそが重要で、わからないことは専門家に聞いたり、ネットで調べたり、さらにはその情報の真偽を自分で確かめることも含めて問題に迫っていく。試験で覚えたことを吐き出しておしまいではなくて、試験が終わってからも、自分が気になったことをずっと考え続ける。そんなふうに、勉強や試験が変わっていかなくてはならないのではないかと。

私は、大学で教職課程の教員をしています。これまでの授業や学習のスタイルを変えていくためには、教員養成のあり方においても大きな転換をしなければならないと思っています。第1部でもOECDのPISAや「キー・コンピテンシー」などの話が出ましたが、皆さん御存じのように、例えば、PISAでの「読解力」は、単にテキストを読んでその内容を理解できるということではなく、そのテキストを読むことを通じて、自分の知識や可能性を広げ、さらには、効果的に社会に参加するために、そのテキストをどう使えばいいのか、というところまでを含めて、「読解力」と定義しています。そうすると、今までのように与えられた本を読むのではなく、自分がこういうことを知りたいからこの本を読む、あるいは、知りたいことについて読むべき本をどのようにして見つけていくのか、さらには、本を読みながら自分が生涯をかけて追い求めるようなテーマを探していく、というようなこ

とまでも意識していくことが必要になります。

次の学習指導要領では、何を学ぶかだけでなく、学んだことで何ができるようになるのか、さらには、どのように学ぶかについても考えていかななくてはならない、とされていますので、おそらく、この後の話題になると思うのですが、そうした面を含めた新しい教育を進めていくための「チーム学校」であったり、そうした教育をサポートするための「教育総合センター」について、まさに全体のテーマにかかわりますけれども、そういう政策を、どのように区として推進していくのかが重要になると考えています。

保坂区長 次に、学校現場に詳しい松平委員に伺いたいんですが、教員も大変忙しい。子どもの目を見て話す時間がない。しかし、その子どもも忙しいんですね。ある場で、日本人の長時間労働ということで、例えばオランダに教育視察に行ったときに、どこの家庭でも午後6時には一緒に食卓を囲むのが当たり前で、つまり6時に塾に行っている子なんか誰もいない状態なんですという話をしたときに、いや、お父さんも帰ってくるのが遅いし、お父さんより子どもが遅い、午後10時過ぎにならないとお子さんが帰ってこないみたいな話をお母さんたちから聞いたこともあります。そういう意味では、非認知能力じゃなくて認知能力一辺倒で、しかもテストをクリアして、あるいは偏差値や受験ということで強く支配されているような状況がずっと続いていると思うんですが、そういう中で学力の再構築とか転換というのは、言うのはたやすいけれども、現実に学校現場ではどうでしょうか。

松平委員 確かな学力、豊かな心、健やかな身体、これらはどの親も望んでいることです。教師はその親の願いをかなえるために、日々忙しさも忘れ努力しているわけです。アンケート調査によれば、新規採用教員は望ましい人間性や社会性を培うための検証も必要だが、子どもたちに確かな学力をつけてあげるための専門性を高める研修を切に望んでいます。この意味でも、新教育センターには大きな期待をしています。これまでは、自分のネットワークなど限られた範囲内でしか探したり相談できなかったりしたものが、新教育センターに問い合わせれば、蓄積された様々な情報が瞬時に手に入る。学校からもアクセスでき自由に閲覧できる。今までは、たとえ身近に素晴らしい教材がありコピーしたくても、著作権の問題等があり簡単にはできませんでした。でも、世田谷区には土曜講習で使用した独自の教材をはじめ、研究授業が行われた際の多くの指導案もあります。それらを整理し、活用できるような情報の宝庫としての役割を期待しています。また、私が校長時代には、教員からインターネットの閲覧制限が厳しすぎると苦情を言われたものです。学

校だからやむを得ない面もありますが、新教育センターではWi-Fiが活用でき、自由に調べものができる環境にしてほしいものです。教員の研修を充実し、彼らの資質向上を図ることが指導方法の工夫・改善につながり、ひいては子どもたちの学力向上にもつながると確信しています。今の子どもたちは、時間、空間、仲間の三間がないといわれています。ないない尽くしてしょうがないとあきらめず、試行錯誤、何とか工夫しながらやっていくしかないと感じています。

保坂区長 新教育センター、総合教育センターでプロフェッショナルな教育技術とありますが、こういうときにはこういうふうに指導しようとか、あるいはこんなにすぐれた教材がある、このことをしっかり現場に伝えていく役割、また、現場が困ったときに、みんなでその学校を支えるというようなことが大変重要だと思います。

澁澤委員に伺いたいんですが、学校あるいは教育、学力観の転換、学びの再構築と、ここ2年ぐらい議論してきているわけですがけれども、新教育センターでそれを実現するというと同時に、学校現場でも、また、学校に来ることができない、あるいは現実に来ていない不登校の子たちも500人近く、今世田谷にはいます。教育を受ける権利という意味では非常に心が痛いわけですがけれども、学びの転換、それから、特に非認知能力的な思いやりとか、ちょっと弱っている子どもを抱き起こして一緒に頑張ろうよとか、何かそういう部分は点数で評価されてこなかったんですね。そこをどういうふうに世田谷の教育は転換していけばいいのか、御意見をお願いします。

澁澤委員 私は、やっぱり入り口をふやしてあげるといって、評価する価値軸をたくさんつくってあげるといってことに尽きるんだと思います。例えば、今、学校の統廃合、それはある意味では非常に効率的な学校運営をやっていくということですがけれども、統廃合されて、その跡地をどうするかとか、残った施設をどうするかといったときに、そこにスポーツセンターをつくるだけではなくて、新たな教育の場をつくっていく、そういうような仕組みができたらすてきだなと思うわけです。

不登校になった子どもたち、それはいろんな理由があるんですが、例えば今の高校生たちと話していても、自分たちは社会ともっと接点を持ちたい、いろんな芸術でも、それから経済でも、地域でも、社会といろんな接点を持って、そこで問題意識を持って、自分たちも参画して解決をしていきたいのに、今の学校教育の中だけでは全く、一定のカリキュラムをこなさなきゃいけないといって、その部分のはけ口がなくなって、意欲がなくなって、不登校になったという高校生たちが、うちにも何人か来ています。

そんな意味で人間の評価、価値軸はまさにこれから多様性の社会、多様でありながら全部が1つにつながっているという社会をつくっていかないと、これからの持続的な社会はつくれませんし、国連もSDGsですとか、そっちの方向に世界全体が向こうとしています。その意味ではいろんな切り口、要するに評価軸を持った教育の場をどれだけ私たちが用意してあげられるか。それは逆に、このような世田谷でないと用意できない。田舎の中山間地がそれをやれといってもなかなか難しいところがあるので、それはぜひ世田谷が率先して、そういう場をつくっていくということをみんなで考えていきたいなと思っております。

保坂区長 堀教育長に伺いたいんですが、今、教育センターがありますよね。新総合教育センターにお引っ越しですかという、確かに引っ越す面もあるけれども、しかしながら、それイコールではなくて、ここに掲げているような新しい課題、学校支援とか、学びの再構築とか、そういうところのある種のシンクタンクというか、学校現場の困難なところもよく知っていて、具体的に有益な何か支援ができるようなことを大いに期待したいところなんですが、どんな構想でしょうか。

堀教育長 ぜひこの場でそういう話をさせていただき、今後の教育センターの基本計画に入らせていただければなと思っております。先ほど、澁澤先生からも話がありましたが、先月で校長ヒアリングが終わりました。その中で、ある校長がこういうことを言っておりました。新しい学力観についての理解が必要であると。つまり、学力といいますと、試験などで高得点を得るための知識が学力と捉えられがちですけれども、みずから学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力が本当の学力である、数値ではあらわせないけれども、これが本当の学力観であるということをおある校長が言っておりました。まさに、これが次期学習指導要領の中で求めていく資質能力になるなと思っております。

日本の教師は、オランダ、フィンランドの教師とは違いまして、大変忙しく、八面六臂の大活躍をしております。諸外国の教員は、御案内のように教科指導がオンリー、メインになりますが、日本の場合は生徒指導、部活指導、進路指導、いろんなことを取り組んでおりますし、地域の問題、家庭の問題も学校、教員の肩にのしかかっているというのが現状かなと思っております。私どもは、教育総合センターを新たに作る、場所、量的にも質的にもリニューアルするという中で、こういう状況にある教員と学校にできるだけ子どもとかかわる時間をつくってあげたいということで、給食費の公会計化、これは23区でも珍しいという話で、いろんなところから今視察にいらっしゃっておりますが、給食費の

公会計化とか人事・文書システム、それから、夏季休業日、8月13、14、15日は学校が一斉お休みですよ、ゆっくり休んでいるんなことを考え、自分の心の中にいるんな引き出しをつくってほしいというようなことを本年度から全校展開させていただきました。また、事務職に副校長のサポートをつけるということも、今、試行的に取り組んでおります。

こういうものを教育総合センターの中で専門的な意見もいただきながら、ポストもつくりながら、先ほど見ていただいたと思いますが、センター長は専門的な方にお座りいただきます。教員は研修をよくしています。自分自身も学校の中でも、私ども教育委員会でもやっておりますが、それを支え、かつ研究していくという仕組みが必要です。この教育総合センターでは、センター長は専門的な方にお座りいただき、教員の教育研究アドバイザー、大学とも連携したそういう仕組み、学校支援のバックアップを具体的につくっていきたいと思っております。

以上です。

保坂区長 時間が迫ってきて、永井委員、一言だけ、世田谷の教育が少しでも前に進むように、新教育センターに何か期待の一言、御注文があれば。

永井委員 子育てをしていると、この問題は教育委員会、この問題は福祉課とか全然そんなことを考えていなくて、1人の子どもを育てるのにはどこだろうが親としては関係ないんです。悩んだときにどこに相談に行ったらいいのかというのが、悩みの1つでもあったので、そういった相談できる窓口というのを新教育センターに欲しいなと思えます。

保坂区長 ありがとうございます。大変重要なポイントで、世田谷区では今年の7月から、チームで世田谷版ネウボラという名前で、いわば出産前から乳幼児期の育児の支援ということもやっています。また、学校の新教育センターも、きょうの議論は担当が違いますので、小学生になれば教育委員会、その前は子ども・若者部というふうになっています。それを一つながりにしていこうよということで次回に続けていきたいと思いますが、きょうの1つのテーマ、幼児期からの豊かな「遊びと学び」の環境づくりということ、ここは生まれて幼児の段階で、いわば早期教育という数値化されるところに収れんするのではなくて、なるべく自由に、また創造力を膨らませるような機会や空間や条件をつくり出していこうということだったと思います。

また、そのことは実際にデンマークに行ったときに、森の幼稚園があるんですね。要するに森に子どもたちが入っているんですね。零下10数度まで森の中にいるそうです。びっくりしたのは雨が降っても、かっぱを着ているんだというんですね。その子たちはずっと

森にいます。だから、身体能力が高くなるわけなんです、小学校の半ばぐらいからすごく学力が高くなって、集中力がすごくあるんだということで、森の幼稚園は人気でなかなか入れないぐらいのようなんですけれども、そういうこともやはりヒントになるのかなと思います。

つまり、幼児教育、幼稚園や保育園、あるいは学校、それ以外に例えば児童館という場所もあります。あるいは児童館以外のコミュニティ施設もあるでしょう。そういう放課後、あるいは学校外の学び、育ち、ここもトータルに子ども、親から考えてみれば、子どもが育つというのは別に役所の担当ごとに分かれていないので、そこをトータルに支えていく教育の質、子どもが育っていく力の支援、自発的、内発的な意欲を自然に持っていきけるような世田谷区の教育改革というのを新教育センターとともに、今いろいろぶつかっている学校の課題があります。なかなか授業に集中できない子もいるでしょう。そして、秘められた能力を持っていてなかなか伸ばす機会がない子もいると思います。不登校の子も、先ほど言ったようにかなり多いということでいうと、学校をきちっとサポートしていくとともに、必ずしも今サポートし切れていない子どもたちが育っていく、学んでいくということもきちんと保障できるような教育の幅広い改革というのを目指していけたらなと思います。

きょうはちょっと予定を大幅に押せ押せになってしまいまして、総合教育会議はこの辺でおしまいにして、また第2回目はきょうの話題を引き継いで、具体的に私がまとめて言ったような場をどうつくるのかというあたりの話をしていきたいと思います。皆さんありがとうございました。教育委員の皆さんありがとうございます。（拍手）

司会 保坂区長、教育委員会の皆様、ありがとうございました。

以上をもちまして、世田谷区総合教育会議及び世田谷教育推進会議のシンポジウムを終了いたします。本日は御来場ありがとうございました。

午後4時44分閉会